

二〇二一年度

入学試験問題

国語

注意

- ・指示があるまで開いてはいけません。
- ・答えは解答用紙に書きなさい。
- ・本文は、問題作成上、表記を変えたり省略したりしたところがあります。
- ・記号がついているものはすべて記号で書き入れなさい。
- ・句読点や「」も一字とします。
- ・試験中は横を向かないこと。早く終わっても周囲を見まわしたりしないこと。そのような場合には注意されることがあります。

① 次のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) コクソウ地帯
- (2) エイセイを打ち上げる
- (3) 魔がサす
- (4) 小説のヒビヨウ家
- (5) 親コウコウ
- (6) タイマイをはたく

② 次の詩を読み、あとの問いに答えなさい。

わたしの世界

志樹逸馬

窓があるから

ベッドにいても空が見える

窓の外には草の生えている^④大地がある

戸だなには本立がついていて

いつも話相手になることを待っている

食器と

ひと枝の花と

体温を計りにくる看護婦さんと

食事を運んでくれる助手さんと

日に1度はかならずたずねてくれる妻と

卓上^{たくじょう}のオモチャの子犬と

ここにある

わたしの一日

どんな^③にかかっても

ひかりのそそぐ窓があり

ベッドをささえる^⑤大地があれば

草木のおう風が吹き

人を恋^こいうる場所があれば

そこは

① わたしのすまいとして足りるのだ

(志樹逸馬『志樹逸馬詩集』方向社)

(1) この詩には擬人法が用いられていますが、最初に出てくる一行を詩中から探し、はじめの二字を書きぬきなさい。

(2) ①「大地」と②「大地」の違いとして、ふさわしいものはどれですか。

- ア ①は離れたところにあるありふれた自然であるのに対して、②は〈わたし〉を支える心強い場所
- イ ①は生命力溢れる豊かな自然であるのに対して、②は衰えていく〈わたし〉が最期を迎える場所
- ウ ①は憧れを感じてやまない遠くの自然であるのに対して、②は〈わたし〉のそばにある色あせた場所
- エ ①は健康な人に近い自然であるのに対して、②は〈わたし〉のような病人でも自然を感じられる場所

(3) ③「わたしのすまいとして足りるのだ」とはどういうことですか。

- ア 療養中で健康な生活を送ることは難しいが少しでも長生きすることを誓う。
- イ 自分に向けられた優しさを感じてこの瞬間が恵まれていることに痛感する。
- ウ これまでは気づかなかった自然の豊かさを感じることができて心が安らぐ。
- エ ひとりであると感じ落ち込みやすいが看病してくれる人のおかげで気が紛れる。

(4) この詩を説明した次の文章について、あとの問いに答えなさい。

この詩の作者は、今、何らかの③に冒され、自由に外を出歩けない状態にある。閉ざされた部屋で過ごすことを余儀なくされてはいるものの、自分が心をゆるした人やものに囲まれて感じている④、そしてそこから得られる満足感。作者は、この部屋で誰もが襲われるはずの⑤閉塞感から解放され、人生の最期を安心・納得して迎え入れようとしている。

① 詩中と説明文中の③には同じ語が入ります。自分の言葉で漢字一字で答えなさい。

② ④に入る表現を答えなさい。

- ア 少しの後悔
 - イ つのる期待
 - ウ 小さな幸福
 - エ 明るい希望
- ③ ⑤「閉塞感から解放され」とありますが、作者を外の世界につなげているものを詩中から一語で書きぬきなさい。

三 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

私の連れ合いが亡くなつて、私にもつとも辛かつたのは、私の話を聞いてくれる存在を失つたことであつたかもしれない。私たち夫婦は、とにかくよくしゃべる夫婦であつた。そして、今になって気づくことは、どうもお互いが正のフィードバックをかけあつていたような気がする。

相手の話を否定したり、**㉑**な反応をするのではなく、ポジティブに受け取る。その第一歩は、相手の話に興味を持つこと以外ではないが、「その考え、おもしろいよね」というベクトルでまず自分をその話のなかに組み入れられるか。それが話を聞く第一歩であろう。もし、相手の話に、さらにポジティブな反応を返すことができれば、これ以上ありがたい話し相手はないだろう。

もちろん客観的に、かつ冷静に判断して、的確なゴー、あるいはストップのシグナルを出せることは大切なことである。しかし、私たちが日常、話を聞いて欲しいと思うのは、たいていの場合は、まだ自分の考えがまとまっていなければ、なんとか人に話す過程で、あるいは聞いてもらう過程で、その考えの輪郭をはっきりさせたいというような、いまだ「考え」としても形をなしていないような状態で投げかける場合のほうで、圧倒的に多いような気がする。

㉒誰かを相手に、取り敢えず話すことによつて自分の考えをまとめようとする会話、あるいは、話をしながら、まだ見いだせていない解決策をなんとか模索しようとする会話。意識するとしなやかかわらず、自分の考えを進めるために必要な会話というものがあるのである。

そんなとき、会話あるいは対話の相手に求めているものは、端的に言つて「相槌」なのではないだろうか。「相槌」というのは、取り敢えず相手の意見を受けられることからなされるものである。「なるほど」でもいいし、「おもしろいなあ、それで」と促すのでもいい。「それ、すごいなあ」なんて相槌を打つてくれれば、喜んでどんどん自分の考えが開いていく。歩幅もどんどん大きくなつていく。

そんなポジティブな「相槌」によつて、次々に自分のアイデアが展開し、どんどん深く、あるいは高く伸びていくのを実感するとき、「俺って、結構いいこと考えてるよなあ」と、自分の能力というものの蓋が開かれていくのを実感するものだ。自分が全的に受け容れられていると感じることができるとき、人間はもう

一歩先の自分に手が届くものである。自分という存在が世界に対して開かれていくという体験である。

逆に、こちらが考えを述べ始めると、取り敢えずそれを否定するところから対話を始めるという人も結構いるものだ。否定的、あるいは消極的な反応しかできない人である。自分の意見を述べるといふのは、自分で考え抜いた理論を堂々と展開するといった場面とは違う場合のほうで圧倒的に多いのである。

おぼろげと意見を述べ、相手の反応を見ながらその軌道修正を行うというのが、日常の場面である。そんなときに、冒頭から、「それは意味無いだろう」とか、「そんなことは誰でも考えつくことだよ」とか、「それは無理だよ」、あげくに「ばかばかしい」などの反応が返ってきたら、もはや**㉓**自分の考えのマグマに形を与えようという意欲が完全消滅することだけは確かである。

そんな常態に**㉑**な反応しかできない相手とは付き合えないに限ると私は思っている。損である。否定的、消極的な対話の相手は、自分を小さくすることはあつても、自分の可能性を開いてくれる存在にはなり得ない。まずは受け容れることから始める。相談される場合だけでなく、日常生活における家族や友人たちとの付き合いのなかで、これが意識しなくてもできるような自分にしておきたいものである。

このことは特に自分の子どもとの対応について心したいものである。親が子に對するとき、子どもが何か言うと、すぐさまそれを否定ないしは無視してしまう親は結構いるものだ。「そんな**㉒**愚にもつかない空想みたいなことを考えてないで、早く勉強しなさい」なんて、思い当たる親も少なからずいるだろう。

そんな反応が、子どもの可能性を無為に摘み取ってしまったことに、ほとんどが気づいていない。親として、子どもの言うことの是非を判断して、正しい方向性を示しているつもりで親が断然多いが、**㉓**適切な判断と、子どもが自分の才能あるいは可能性に目を開かれることの重要性を較べてみれば、どちらが子どもの将来にとって大切であるかは、あらためて言うまでもあるまい。

子どもが思い切つたアイデアや思いつきを口にして、親がそれに否定的に反応する場合、多くは親がそれが無理だと判断することからくるのだろう。やつてもきつと失敗する、挫折も味わうかもしれないし、第一、そんなばかばかしいこと

に費やすのは時間の無駄であると判断する。

しかし、前にも述べたように、^⑤子どもや若者には失敗経験こそが必要なのである。挫折も経験したほうがいい。なによりまずいのは、まだやりもしないで、それが無駄と言われてやる気をなくしてしまうことである。実行しないであきらめるよりは、実行して失敗を経験するほうが、はるかに^⑥な時間となるはずである。

実際に実行するまで行かなくとも、子どもが考えたことを思考実験として推し進めるように誘導することも大切であろう。ある思いつきを話したら、「それで、次はどうするの?」と話を次に進める。一つの思いつきから、次のアイデア、手順、経路などなど、さまざまの可能性について、彼自身が考えを進められるように背中をおしてやるだけで、自らものを考えられるという自信を持つことができるものであり、さらにそれが例えば親に褒められたりすることで得る自信こそが、成功体験と同じような効果を持つはずなのである。

親はおだて上手であることが、必須であると思っている。日常のちよつとしたおだてが積み重なることによって、子どもの可能性の開き方は大きく影響を受けるはずである。

意見を言わずに、じつと相手の言葉に耳を傾ける。すぐに何か言ってしまうたくなるものだが、それを辛抱して聞き続け、相談する相手の一歩上からものを言おうとしないこと、これはしかし、思っている以上にむずかしいことではある。

特に相談をしてきた相手が自分より歳下、未熟、あるいは組織での身分(嫌な言葉だ、位置づけくらいの意味で)が下の者である場合、得てして相談を受けたものは、その言葉にじつと耳を傾けるといよりは、「それらしい」言葉で辻褃をあわせようとするものだ。ともに^⑦同じ目線で考えてみようというよりは、自分の地位にふさわしい対応を無意識に求めるのである。

相談された内容に対して、なかなか「私にはわからない」というひと言が言いにくい。相手は、何であれ私のひと言を待っているのだという意識から、得てして毒にも薬にもなりにくい。「もつともらしい言葉」、いかにも「それらしい言葉」を援用して、その場をまとめてしまおうとする精神の傾斜を無しとしない。これは私自身を省みても、そんな場面を思い出すことは一度や二度ではない。

難しいことではあるが、まず、相手の言葉に寄り添いながら、海抜ゼロメートルの位置から、可能性の最大値を考えてみることに、そんな自らの思考傾向の意識化こそ、若い世代の可能性をいっばいにまで延ばせる、あるいは開かせる契機があると信じてもいいだろう。

*フィードバック：ここでは、「反応を示す」の意

*ベクトル：方向性

(永田和宏『知の体力』新潮新書)

(1) ㊦ (二カ所) には「ポジティブ」と対になる語が入ります。カタカナ五字で答えなさい。

(2) ㊧ 「誰かを相手に、取り敢えず話すことによって自分の考えをまとめようとする会話」とありますが、これと対照的な会話はどのようなものですか。「会話」に続くように本文中から十五字以上二十字以内で探し、はじめと終わりの三字を書きぬきなさい。

(3) ㊨ 「自分の考えのマグマに形を与えようという意欲」とはどのようなものですか。

- ア 自分の熱い情熱に支えられた考えを考え直したいという思い
- イ 自分の限りある考えの可能性をさらに伸ばしたいという思い
- ウ 自分のまとまりきらない考えを何とかものにしたいという思い
- エ 自分の内からわき起こった考えに意味を見出した^{みいだ}という思い

(4) ㊩ 「愚にもつかない」の意味を答えなさい。

- ア うしろむきな
- イ おぼろげな
- ウ うがった
- エ ばかげた

(5) ㊪ 「適切な判断と、子どもが自分の才能あるいは可能性に目を開かれることの重要性」を言いかえているのはどれですか。

- ア 子供がやろうとしていることの意味とそれが確実に成功する可能性の重み
- イ 親が正しいと思ったことと子供がこれから伸びて行くであろう可能性の重み
- ウ 安全性に対する是非の判断と子供が大人になったときに花開く可能性の重み
- エ 失敗するかもしれないと足ぶみすることと失敗しないという可能性の重み

(6) ㊫ 「子どもや若者には、挫折も経験したほうがいい」とありますが、次の文はその理由を説明したものです。(1)・(2)に入る語を本文中から漢字二字で書きぬきなさい。

失敗や挫折の経験を積むことで (1) をもって判断できるようになり、それがめぐりめぐって (2) と同等のはたらきを子供や若者に与えるから。

(7) ㊬ に入る漢字三字の熟語を、次の漢字を組み合わせて答えなさい。

用 無 義 果 味 意 効 有

(8) ——— ㊦「同じ目線」を言いかえた表現を本文中から十一字で探し、はじめの三字を書きぬきなさい。

(9) 本文の内容と合っているものを答えなさい。

- ア 筆者にとって最大の理解者である妻の存在は大きく、常に筆者のやることに賛成してくれてその可能性を伸ばしてくれた。
- イ ポジティブな「相槌」によって人間関係は飛躍的に発展して、将来的にも自分がやれることの幅をも大いに広げてくれる。
- ウ 親は子どもの可能性にふたをすることなく、できるだけおだてながら多くの失敗をさせて様々な経験を積みさせる方がよい。
- エ 相談を受けたときに相手の意見にじっくりと耳を傾け、「私にはわからない」と言えれば本当の相談者として認められる。

四 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

私たちが生きていくためには、三つのパンが必要だと私は思っている。「体のパン」「心のパン」「脳のパン」だ。

聖書に「人はパンのみにて生きるにあらず」という有名な言葉がある。パンを供給するための農学や経済学などを実学と呼ぶ。これが「体のパン」である。

しかし、私たちはパンがなければ生きていけないが、それだけでは満たされない。体だけでなく、心にもパンを与えなければ心が干からびてしまうだろう。そこで宗教や芸術といったものが「心のパン」に当たる。

三つめの「脳のパン」が理学部や文学部で行う学問だ。私たちの生活を便利にするためでもなく、たくさん食べ物をつくるためでもない。例えば、食べられないナマコを研究してもあまり役に立たないが、このような学問を「虚学」という。

④虚しい学問なんてひどい呼び方だが、なぜこんな生き物が存在するのかを研究したりして、世のさまざまな物事について知ることは、すなわち自分の世界を広げることになる。これによって脳みそが快感を覚えるのだ。【中略】

君たちは「一生なんてどうせ一回きりだ」と思っているかもしれないが、「生物の時間は繰り返す」と考えてみたらどうだろう。

生物の時間とは、心臓がドキドキ打つ、呼吸を繰り返すといった「繰り返しの時間」だ。個体の寿命とは、親が生まれて死んで、子が生まれて死んで、孫が生まれて死ぬという⑤の時間である。同じ状況に繰り返し戻るから、回っているととてもいい。生物の時間は「一回転の時間」なのだ。それに対してまっすぐ流れていくのが物理の時間だ。

時間は回るのか、それともまっすぐか？ 昔から人間は二つの見方を持っていた。時間が回ると考える民族はマヤや古代ギリシャ、インドがある。日本もやはり回る時間の中で生きていた。

それに対して直線的な時間観を持つ代表的な存在はキリスト教徒。キリスト教では、神様がこの世をつくったときから世の終末まで一直線に、ゾウがいろいろなネズミがいようが関係なく、神様の時間が流れていく。この時間の見方がニュートンを介して古典物理学に入っていた。ニュートン力学においては、時間はまっすぐ進むが、過去から未来へ進もうと、未来から過去へ進もうと、力学とし

ては成り立つ。だがニュートンは、絶対時間は一方方向のみ進むと考えた。これは彼のキリスト教への信仰がそう言わせているのである。科学とは西洋近代という文化がつくり出したものであり、それはキリスト教の強い影響を受けているものだ。そういうことも民俗学などさまざまな勉強をするとわかってくる。

では、なぜ生物の時間は回ると私が考えるのか。

地球の歴史は四六億年、生命の歴史は三八億年と言われている。地球ができて間もない頃からずっと生物は絶滅することなく続いている。だから生物は続くようにできている、回って続いていくのが生物なのだと考えてよいと思う。

私たちの体は非常に複雑にできている精密な構造物だ。これをどうすれば維持できる？ 例えば、永遠に建ち続けられる建物はどう建てたらいい？

一番簡単なものは、絶対に壊れない建物をつくること。しかしこれは不可能だ。

かたちあるものはときがたてば絶対に壊れる。物理学には熱力学の第二法則というものがああり、ときがたてば秩序あるものは必ず無秩序になっていくのだ。永遠に続く建物は、絶対に壊れないようにするというやり方では建てられない。

壊れてきたら直せばいいという考えもある。現存する世界文化遺産は大抵そういうふうになっている。法隆寺がそうだが、新しい部分と古い部分がかつちやになっっているのだから、⑥に触るようにして、遺産というかたちで保存するしかない。現役でバリバリ働けるというものでもない。

では、働き続けられる建物をどうすれば建てられるのか？ その答えは伊勢神宮だ。

伊勢神宮は式年遷宮といって二〇年ごとにまったく同じものを建て替えてしまう。持統天皇以来、一三〇〇年続いているが、今も現役で機能している。これほど長い年月機能し続ける建物は世界でほかにない。まったく同じものを建て替えて続けていくというやり方は、とても賢い方法だ。

しかし、⑦伊勢神宮は世界文化遺産に指定されない。なぜなら、西洋人いわく「これはたかだか一五年しかたっていないから」。けれども、日本人の感覚からすれば「回っているから一三〇〇年続いているのだ」となる。これは時間に対する見方の違いだと思う。そして、生物は伊勢神宮方式だ。【中略】

何をどうしたって私たちはやっぱり死ぬ。死ぬと虚しいから、どこかに永遠が

ないと心が落ち着かない。人間とはそういうものだ。だから天国の永遠を考えて宗教を生み出した。㊦生命そのものが「この世の永遠」なのだ。子ども、そして孫とかたちでこの世に、永遠に私が生き残っていく。これが生物。生物学はこういう見方を提供してくれる。だから生物学を勉強すると永遠が得られる。心が落ち着くのだ。

今の日本人には永遠という発想がない。古代の日本人は、仏教であの世の永遠を保障し、神道でこの世の永遠を保障し、両方の永遠で安心して生きていた。神様の前で結婚式を挙げる。結婚はこの世の永遠を保障するものだから神道なのだ。お坊さんと呼んで葬式を営む。仏教はこの世の永遠を保障するものだからお坊さんなのだ。西洋人からは「日本人は二つの宗教を股にかけている節操のない民族だ」と言われるが、私はそう思わない。日本人は実に賢く永遠とつき合ってきたのだ。

生物学だけを勉強していたらこういう発想はできない。私はいろんな分野の学問を勉強するうちに、この結論にたどり着いた。脳みそにとって、これはかなりの快感だ。そのうえ私自身が安心して生きて、死んでいける。今の日本人は安心

して死んでいくことができない。君たちは精一杯生きて安心して死んでいけるよ
うな人生を送らなければならぬし、そのためにはもの見方を身につけなければ
ならない。だから学問が必要なのだ。

私のような科学者が世の中の価値観に対して物申すのは越権行為だと見る風潮
がある。しかし、これは間違いだと思う。科学という行為そのものが一つの価値
観であり、貨幣経済はまさに科学を下敷きになっているものだ。生物学というお金
儲けにはつながらないが㊦「脳みそのパン」となる学問をすることで、私た
ちの生活がどうなっているのか、今の生き方はこれでいいのか、という世の中と
は異なった見方、世界観をつかむことができるのだ。これこそが学問なのだと思
う。私はみんなに少しでも良いパン、おいしい脳みそのパンを提供したいと思っ
ている。

〔何のために「学ぶ」のか〈中学生からの大学講義〉1〕
ちくまプリマー新書より 本川達雄「生物学を学ぶ意味」

(1) ———— ㉠ 「虚しい」の意味と対になる語を本文中から漢字一字で書きぬきなさい。

(2) ㉡ には、波線部にあるような「年をとった者が退き、若い者にかわる」という意味の語が入ります。漢字四字で答えなさい。

(3) ㉢ を含む傍線部は、「おそろおそろの気をつかって大切に扱おう」という意味の慣用表現です。ひらがな四字で答えなさい。

(4) ———— ㉣ 「伊勢神宮は世界文化遺産に指定されない」とありますが、このことから世界文化遺産に認められるために伊勢神宮に欠けている条件はどのようなものがありますか。

- ア 秩序ある部分と無秩序になった部分とが長年混在していること
- イ 秩序の崩壊は避けられないが、現役でいられるよう努めること
- ウ 無秩序が生じたところだけ秩序を回復させながら存続すること
- エ 新旧を入れかえて、極力長く秩序あるものとして機能すること

(5) ㉤ に入る語を答えなさい。

- ア そのうえ
- イ けれども
- ウ ただし
- エ あるいは

(6) ———— ㉦ 「脳みそのパン」となる学問は世界観をつかむことができる」を言いかえている表現を「～ことができる」に続くように本文中から三十二字で探し、はじめの三字を書きぬきなさい。

(7) 次の説明は、本文の要点をまとめたものです。「Ⅰ」・「Ⅱ」に入る語を本文中から漢字二字で書きぬきなさい。

学問の本質を「知る」ことは、脳にとつての「Ⅰ」であり、我々に「Ⅱ」をもたらしてくれる。逆に、知らなければ不安が募ってゆくばかりだ。知る楽しさをもとに、世界を知り、自身を知り、それによって世界の中での自分の立ち位置を知る。これが学問の楽しさである。

(8) 本文の内容と合っているものを答えなさい。

- ア 貨幣経済は科学を下敷きにするので、生物学は「体のパン」の学問である。
- イ 直線的な時間軸をもつ西洋では、生命そのものが永遠で神様のものである。
- ウ 伊勢神宮は式年遷宮が続く限り、物理的な秩序の崩壊をまぬがれるだろう。
- エ キリスト教の色彩が濃かった近代西洋文化の土壌が、科学を生み出した。

五 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

拓朗は、妻の美姫と中学生になる娘の真琴と三人暮らし。十四年前、ひとりで食堂を切り盛りしていた母が急に亡くなり、拓朗は食堂を改装して居酒屋を始めたが経営がうまくいかず、思いつめていた。店をたたむ前に、せめて亡き母の「おふくろの味」をもう一度口にしたいと願ってやまなかった。

「冷めちゃうからさ、ほら、食べてよ」

「ああ、そうだな」

腰を落ちつけ、いただきます、と手を合わせるとさっそく箸をとった。どんぶりを手に持った瞬間、あれ、とかすかに違和感があった。親子丼の卵からかまぼことしいだけが顔を出していたからだ。その具材に見覚えがあるような気がしたのだ。

ちらりと上目遣いで真琴のほうに目をやると、にこにことうれしそうに見ている。はやく感想を聞きたくて仕方ないといった表情に、ともかくまずは食べてみせなければと口に運んだ。

……！

ひとくち食べて、ぎよっとした。拓朗は一瞬自分の口の中で何が起こったか判らなかつた。こんな莫迦なことがあるだろうか。はじめて食べた娘の手料理の味がずつと追い求めていたものと同じだなんて。

それはおふくろの味そのものだった。

「何？ そんなにまずい？」

目を見開いたまま動きをとめた拓朗を見て、真琴が不安そうに顔を覗きこんできた。その声ではつとわれに返る。

「いや、うまい。うまいんだよ、すごく」

「ほんと？ よかった」

「なあ、真琴。この味……」

拓朗が訊ねると、真琴は、へへ、と笑いながら移動した。調理器具を並べた棚

に隠してあったらしいノートを手にとると、じゃーん、と云って目の前に出した。

「実はさ、これを見ながらつくったんだよ」

「何だよ、それ」

見覚えのないノートだった。拓朗は右手で箸を持ったまま、左手でノートを受けとった。表紙に並ぶ文字を食い入るように見つめる。

「部屋の片づけをしてたら押入れから出てきたんだ。ねえ、それ、誰の字？」

「お前の……おばあちゃんの字だよ」

混乱する頭で何とか答える。その答えを聞いた真琴が「わあ、やっぱり」と小さく歓声をあげて「へー」をうたった。

「そうじゃないかと思っただ。だってここ、もとはおばあちゃんの家だったんだでしょ」

「……ああ」

思ってもみない形での「おふくろの味」の出現に、拓朗はしばし呆然とした。

食事を終え、拓朗はお茶を啜りつつ母のレシピノートをじっくり読みはじめた。

右さりのなつかしい母の文字。このノートが真琴の手によって発見されたことが不思議でならない。母は孫の顔を見ることなく亡くなった。真琴も祖母の顔は写真でしか見たことがない。美姫のおなかのふくらみが少し目立ちはじめた頃、母は店で突然倒れ、それからしばらくして帰らぬ人となった。病院に運ばれた時にはすでに意識不明で、そのままの状態がずっと続いた。だからこんなレシピノートがあったことも拓朗は知らないし、母に今後の店をどうしたいのか、訊ねることもできなかった。

母のためと口では云いながら、自分の勝負のために居酒屋みなみを開業したこ

とを怒っているだろうか。それとも売り払わなかっただけかもしれませんと考えるだろうか。そんなことになるとはまったく予想していなかった時期の母の文字を追っても答えが見えてくる筈もない。拓朗の記憶の中で、食堂を切り盛りしていた母はいつも楽しそうだった。店を小走りに駆けまわる額には汗が光っている。家に帰ると足がむくむと云って、よく手でもんでいた。疲れていたのは子どもの目から見ても明らかだったのに、なぜか母の笑顔しか思いだせない。

丁寧に綴られたレシピが拓朗には意外だった。母はもつとおおらかでおおざっぱな女性だと思っていた。くよくよしなさんな、おなががいっぱいになれば人間大抵のことはどうでもよくなる、それが口癖だった。くる客にも同じようなことを云っていたのを聞いた覚えがある。小さな身体ながら、そういうどんと構えたところが常連客たちに人気があった。だからつきりおふくろの味も母の長年の勘だよりのものだと思込んでいたのだ。

ノートにはレシピだけではなく、客の好みや健康面、ちよつとした会話から得られたようなささやかな情報メモされていた。たとえば、誰々さんは高血圧だから塩分は少なめに、とか、誰々さんはこの間入れ菌にしたばかりだからやわらかめのおかずを、とか、誰々さんはニンジン嫌いだから抜いてあげてごはんは大盛、とか、その程度のメモだ。時には食堂でふるまう料理のことだけではなく、客の娘の誕生日を覚え書きしておいて、その横に「ちらし寿司を渡すのを忘れない！」と記されていたりもした。

そういえば、おれの誕生日の時も必ずちらし寿司だったよな。

拓朗は甘い桜でんぶの味を唐突に思いだし、ほほえんだ。あれは自分だけの特別な味かと思っていたけれど、見たこともない客の娘が誕生日に家で同じものを食べていたのかと想像すると、何だかおかしかった。

「何、お父さん。にやにやして、気持ち悪い」
てつきりテレビを見ているのかと思つたら、真琴がソファの背越しに拓朗を観察していた。

「笑ってないさ」
「そお？」

見られていたのが恥ずかしくて口もとをひきしめると、真琴は④云いながらまたテレビのほうに顔を向けた。

気をとり直して再びページをめくり、数ページいったところで今度こそ拓朗は

大きく吹きだした。

「ちよつと、どうしたの？」

突然げらげらと笑いだした父親に驚いて、真琴がすごいはやさでふり返ると鋭く云った。

「やっぱり笑ってるじゃん」

「いや、悪い、悪い……」

そう云って笑いを抑えようとしてもしばらくは無理そうだった。拓朗は突然気づいてしまったのだ、自分の大きな勘違いに。

自分だけが特別だと感じていたちらし寿司を誰か他の子も食べていた、それだけじゃない。母がいつも食堂で拓朗にだけこつそりおまけをつけてくれたのは自分の息子だからという理由ではなかったのだ。それはあの頃の拓朗が食べ盛りで成長期の子どもだったからだ。もしあの食堂に自分と同じ年くらいの子どもが食べにきていたら、母は同じようにおまけしてあげただろう。それを息子の特権だと他の客に対して優越感を抱いていたあの頃の自分に教えてやりたい。

莫迦だなあ、拓朗。お前のおふくろはそんな器の小さい人じゃなかったんだよ。

母が守り続けたあの食堂にいる人たちはみんな平等だった。客でも息子でも関係なく、心を配り、その人に見あったものを提供しようと母は努力した。努力……、いや、愛情といったほうがいいかもしれない。息子の拓朗がないがしろにされた訳ではなく、それこそ家族のような愛情であの食堂を訪れた人々に接していたのだ。

おふくろの味はみんなのものだった。

その事実気づいた今、拓朗は一抹のさびしさを覚えた。けれどもそれ以上に母を誰かに自慢してまわりたいくらいに誇りに思った。自分に何が足りなかったか、拓朗には判った気がした。

おれは客を見ていかなかった。見ていたのは伝票と、客が落としていった金ばかりだった。

常連のようにきてくれていた客も、あの客は家族連れだからあんまりアルコールの数が出ない、とか、サラリーマンのひとり客を晩酌程度の注文で長居して、とか、覚えたのは注文の数や滞在時間に対する不満のようなことばかりで、せっかく足を運んでくれた客に自分が何を返せるか考えたこともなかった。そんな

な店長がやっている店から次第に足が遠のいてしまうのはあたり前じゃないか。拓朗はその客たちの顔をすっかり忘れてしまっている自分に愕然とした。

店をはじめた頃はまだ情熱を持ってやっていたと思う。若かったし、希望にあふれてもいた。店を繁盛させ、美姫や真琴に楽をさせてやりたい、念願の新築マイホームだっけいつか手に入れてみせると夢を語ることもできたのだ。

それがいつしか店の経営に追われ、①目先の利益ばかり考えるようになっていった。少し儲ければ浮かれ、少し損をするとやる気を失くした。いったい自分は何にふりまわされ、くるくると同じ場所で踊らされた挙句に自滅したのか。誰もそんな②へへりなダンスを見せられたくもないのに。

「ちよっ、お父さん。ほんとにどうしたの？」

焦った真琴の声がすぐ近くで聞こえた。

「どうしたって……」

自分はもう笑ってはいない筈だと拓朗は思い、怪訝そうに頬に手をあてると意外にも濡れていた。

泣いている、のか、おれ。

これじゃあ真琴に心配されても仕方ない。慌ててごまかそうと意味もなく咳払いをしてみせる。

「うー、ごほん」

「お店、潰れそうなの？」

「……」

今度こそ絶句した。いつの間にか横に立っている真琴の顔をはじめられたように見あげた。しばらく言葉が出てこない。

「……どうしてそんな風に思うんだ？」

違う、と咄嗟に口でできなかつたことを拓朗は後悔した。どうせいつか判ることだという思いと、だとしても母親の美姫にも話していいことを中学生の娘に正直に話してどうする、という自分に対する③の感情がわき起こる。

複雑な思いで瞳を揺らす父親の顔を見つめ返して、真琴がちよっと肩をすくめた。

真琴は、美姫が電話で「いいパートはないか」と友人に相談していたのをこっそり聞いたという。拓朗は、これまで悟られないよう生活費だけはきちんと渡してきた妻の美姫に店が危ういことを勧づかれ、さらに自分に内緒で仕事を探していたという事実には打ちのめされていた。

「わたしもさ、ちよっと反省したんだ」

「真琴が何を反省するって云うんだよ」

「冷たくしてたじゃん、わたし、お父さんに」

「あ……ああ、そうかな」

「したんだよ。それ、自分でも判ってるから。お父さんが仕事から帰ってたらだらしてるの目にするの腹がたつて仕方なかったし。暗い顔して、自分が一番大変なんだって無言でアピールしてるみたいで、だけど全然やる気なさそうで投げやりなの。それって何が云いたい訳ってつっ込みだった」

「……面目ない」

「ううん、だつてほんとうに大変だったんだよ。だからわたしのほうが悪かったの、ごめんさい」

「いや……」

④素直に真琴に謝られて、拓朗はうろたえた。何なのだ、この展開は。美姫も真琴も自分の知らないところで心配してくれていたのだ。家族の誰も判つてくれないと嘆いていた自分を心底莫迦だと思う。

おれのほうこそ、今まで家族の何を見ていたんだ、ちくしょう。

客も、家族も、おれはきちんと見てこなかった。自分のことに精いっぱい、自分だけ大変だと思ひ込んでいた。そんなやつがやる店が繁盛する筈がないじゃないか。天国でおふくろも呆れて見ているに違いない。すまない、おふくろ……。

猛省する言葉が今さら天国に届いても何がどうなるものでもない。それでも拓朗は謝らずにはいられなかった。

(1) へ へ を含む――(A)は、「合点がいく、納得した」という意味の動作です。漢字一字で体の一部を入れなさい。

(2) (B)に入る語を答えなさい。

- ア うらめしそうに
- イ 不愉快そうに
- ウ おもしろそうに
- エ 疑わしそうに

(3) ー (C)「誇り」とありますが、母のどのような点を「誇り」に思ったのですか。三十文字以上三十五字以内でまとめなさい。

(4) ー (D)「目先の利益」とありますが、本文中で言いかえられている部分を十四字で探し、はじめと終わりの二字をそれぞれ書きぬきなさい。

(5) へ へ を含む――(E)は、「他人の意見を聞かず自分だけでよいと思いついでいる」という意味です。へ へ にそれぞれひらがな二字を入れなさい。

(6) ー (F)「……」で、直前の核心をつく娘の問いかけに〈拓朗〉はひどく動揺している。それは、他にも〈拓朗〉のどのような様子から推察できますか。本文中から五字で書きぬきなさい。

(7) (G)に入る語を答えなさい。

- ア 怒り
- イ 諦め
- ウ 後ろめたさ
- エ 驚き

(8) ー (H)「素直に真琴に謝られて、拓朗はうろたえた」とありますが、このときの〈拓朗〉の気持ちを答えなさい。

- ア これまで家族の存在をないものにし、店の経営しか頭になかった自分に幻滅している。
- イ 妻と娘が自分の知らないところで気づかってくれていたことに心から感激している。
- ウ 家族に対しても何の気持ちも返せていない自分に気づき、不甲斐なさを感じている。
- エ 自分が苦勞を背負い込んでいる間に、娘が知らぬ間に成長したことに心が揺れている。

(9) 次の文章は、〈真琴〉と〈拓朗〉のそれぞれの視点から今回の出来事をまとめたものです。あとの問いに答えなさい。

●真琴の視点

自分の部屋の片づけをしていたら、押入れから見慣れないノートが出てきた。中身は誰かの日常の断片だんぺんが分かるメモやレシビだ。ちょうどお父さんが帰ってきたので、そのレシビ通りに作った親子丼を出してみたら、ずいぶん驚いた様子で喜んで食べてくれた。ノートから目を離はなさないお父さんは、考え込みながら急に笑ったり泣いたり、まるで百面相だ。そのノートは私が生まれる前に亡くなったおばあちゃんのものらしい。①お父さんにとってそれはただの古いノートではなく、特別な意味を含むものようだった。

●拓朗の視点

真琴が初めて作ってくれた飯は本当にうまかった。でも、心によぎる違和感と既視感きしかん。真琴は掃除中そうじに古いノートを見つけたのだという。私は一目で急死したおふくろのものだと分かった。記憶の中のおふくろは、息子を育てながらいつも額に汗を光らせて食堂を切り盛りし、大らかで豪快ごうかいで笑顔を絶やさない女性だった。おかげで店はいつも常連客で賑わっていたけど、このノートを見て、店が繁盛した本当の理由、そして自分に足りないものが何か思い知らされた。

①おふくろを目の前に、息子の顔に戻もどっているのを真琴に見られたくなくて、終始隠そうとしたが、押し寄せる感情を私はどうすることもできなかった。

①であることが最初に分かる〈拓朗〉の行動を本文中から一文で探し、はじめの三字を書きぬきなさい。

②であることが分かる〈拓朗〉の動作を本文中から九字で探し、はじめの三字を書きぬきなさい。